

おばあちゃんの木

波河海咲

おばあちゃんの木

同い年のしづ子が、縁側に出てきた。

風は幼子のもとへ、小さな葉を届けてくれた。

時代は向かってはならぬ方へ確実に進んでいた。しかしどうすることもできなかった——私は一本の木であったから。

やがて、紅い夜が来た。

熱い夜だった。

黒い鉄の鳥達が火薬の糞を落としてゆく。

人の魂がひとつ、またひとつ空へ消える。

しづ子が母親に連れられ飛び出す。

無事に逃げのびることを祈った……その結末も知っていたが。

まわりを見回すと地獄だった。

『私はみんな知ってる。結局戦争は、骨しか残らないんだ。

誰も幸せになれないんだ。確かに時が経てば落ち着くだろうけど、

それは時代も人間も生まれ変わっただけのこと。命ばかり消える

だけ。ああ……』

背中の中で竹を割ったような音がした。炎が迫っていたのだ。私にはどうすることもできない。

その結末も知っていたから、私は静かに目を閉じた。

「この木はな、おばあちゃんと同い年なんだよ」

私は孫にいつも話した。

「しづ子おばあちゃんと？　じゃあ、『戦争』も、知ってるんだよね」

「そうだよ。この木は、空襲で後ろ側が焦げてしまったけど、まだ生きている。おばあちゃんもこの木も、戦争なんて二度とごめんだ、って思っているんだよ」

優しい風は、私たちのもとへ小さな葉を運んでくれた。

「ありがとう、『おばあちゃんの木』さん。ぼく、大人になっても、ぜったい『戦争』反対って、言うからね」

私も木も、嬉しさを表情^{かお}に出していた。木も私を見つめているようだった。

それからしばらくして、私は自分の人生を終えた。

もしも生まれ変われたら、とよく願っていたせいか、再び目を開くと、私は一本の木になっていた。

ところがまわりの景色は、私の幼い頃と同じだった。

またあの時代を体験せねばならないのか。その結末を知っていても、憂鬱にならずにはいられなかった。

同い年のしづ子が、縁側に出てきた。
風は幼子のもとへ、小さな葉を届けてくれた。

(了)

(おくづけ) 『おばあちゃんの木』

初稿 平成五年十二月

改稿版 (八百字バージョン) 平成十四年八月

電子書籍版 (改稿版で作成) 平成二十四年三月

作 波河海咲 (なみかわ みさき)

(c) Misaki Namikawa, Misaki World 141--ob-epub)

<http://www.misakiworld.jpn.org/>

twitter: MisakiWorld (公式情報アカウント)・ komiyatatsh (波河個人アカウント)